

## バーディアから見た ウルク・ワールド・システム論

藤井純夫

Sumio FUJII

The Uruk World System :

A Review from Badia, Another Dimension of the Uruk World

バーディアとは、「バダウィ（ベドゥイン）の住む所」を意味するアラビア語である。具体的には、シリア南東部からヨルダン東部・イラク西部を経て、サウジアラビア内陸部へと続く広大な乾燥域を指す。このバーディアから見たウルク・ワールド・システム論について、少し意見を述べてみたい。

バーディアは凡例の置き場か

2つの図を見比べていただければ、筆者の言いたいことがお分かりであろう。ウルク・ワールド・システム論は、バーディアの存在そのものを全く視野に入れていない。そこで述べられているのは、都市・農村世界における（遠隔交易を機軸とした）社会システム論である。

しかし、バーディアは凡例の置き場ではない。そこには多数の遊牧民が回遊していたと思われる。エル・コウム盆地やアズラック盆地は無論のこと、イラク西部の沙漠地帯のサーベイでも遺跡の点在が確認されている。やや離れるが、シナイ・ネゲブ地方も同様である。蛇足だが、ヨルダン南部における筆者自身の調査もその一例である（藤井2001）。これら一連の調査では、初期遊牧民のバーディアへの進出が前期青銅器時代に最初の全盛期を迎えたことが明らかになっている。メソポタミア編年で言えば、ウルク中・後期から初期王朝期にかけての約1千年間である。この時期（ヒブシサーマルに相当）、バーディアを網の目のように流れるワディの随所に水溜まりができていたと考えられる。そこに季節的な遊牧民の進出が認められるのは、当然であろう。

したがって、ウルク・ワールドには2つの骨格があったことになる。都市・農村という骨格と、遊牧世界という骨格の2つである。ウルク・ワールド・システム論は、このうちの一方しか扱っていない。全体性を欠いたシステム論は、少なくともシステム論とは言い難い。2つの骨格が互いに有機的な関係で結ばれていたとすれば、なおさらであろう。ウルク・ワールド本来の重層性に立脚していないという意味で、同システム論はシステム論の資格を欠いている。

遠隔交易の評価

ウルク・ワールド・システム論の眼目は、（社会全体の変質を促すとは思ってもみなかった）交易という活動の意義を再評価した点にあらう。しかし、それならばなおさら、もう一方の次元にも目を向けねばなるまい。なぜなら、遠隔交易の実務を担ったのは遊牧民であると思われるからである。

ウルク・ワールド・システム論では、遠隔交易があたか

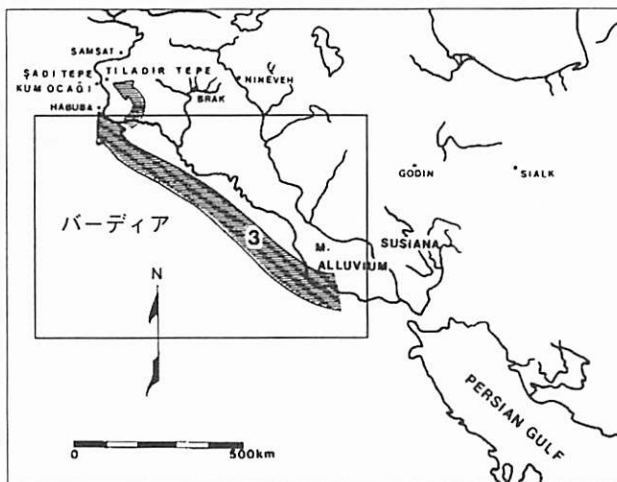


図1 凡例の置き場としてのバーディア  
(Algaze 1993: Fig. 46-c)

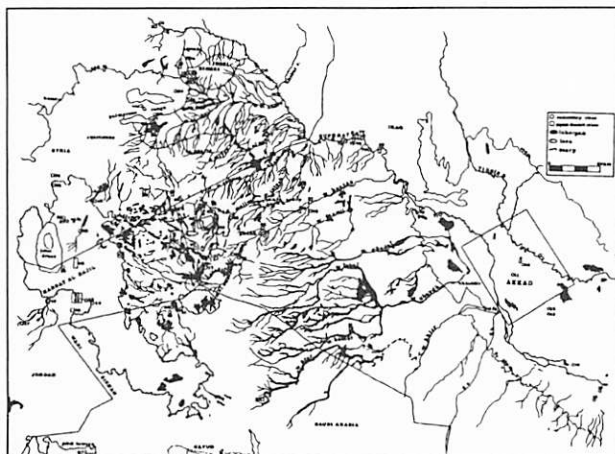


図2 現実のバーディア  
(Zarins 1990: Fig. 1)

も都市住民だけで実施されていたかのように記述されている。しかし、これは同システム論が依拠した近代社会の国家貿易の場合であろう。点と点だけを結ぶ遠隔交易が国家成立以前の段階からシステムとして成立していたとの確証は、実はどこにもない。むしろ、交易路途上の遊牧民から何らかの助力を得ていたと考えるのが妥当であろう。たとえば、ロバの借用、食糧・水の調達、休憩場所の提供、道案内、護衛などである。それどころか、筆者は遊牧民による中継交易の可能性すら想定している。そもそも、遠隔交易に従事した都市住民の中にも、都市周辺の遊牧民が多数含まれていたのではないだろうか。

しかしそれよりも重要なのは、遠隔交易自体の評価である。たとえば、銅鉱は実際にどれほど交易されていたのであろうか。私見だが、この時代のメソポタミアで生産された銅製品の総量は、それほど多いとは思えないのである。仮に500トン（これでも多すぎると思うが）の銅鉱が交易されたとしても、ウルク中・後期の500～600年間では平均して1年に1トンである。ロバ20頭のキャラバンならば、年1回の遠征で十分間に合うだろう。木材などの他の製品についても同様である。全体の交易量を時間枠の中で冷静に査定し直す必要がある。

こうした奢侈品目の遠隔交易よりも重要なのは、その背後にあって社会全体の底流となっていた日常的な物流であり、その前提となった社会全体の流動化、人口のフローであろう（小泉 2001）。その意味でも、バーディアの動向は重要である。これを視野に入れていないシステム論は、システム論としてはやはり物足りない。

#### ウルク自体の遊牧的要素

遊牧の要素は、ウルクという都市自体の成り立ちを知る上でも重要であろう。メソポタミアの都市には、農耕だけでなく、遊牧の要素が色濃く認められる（一例として、藤井 2000a）。

#### 新しいパラダイムの余地

ウルク・ワールド・システム論は、結局の所、都市・農村世界の南北問題に関するパラダイムである。それと対峙するバーディアの遊牧世界については、何も語っていない。しかし、メソポタミアの都市化は、この両者が本格的にクロスし始めたときに進行し始めたように思われる（藤井

2001）。したがって、その一方だけにしか立脚しないシステム論はシステム論としての資格を欠いている、というのが筆者の感想である。

ただし、これは同システム論の提唱者である G. アルガゼのせいではない。原因は、むしろバーディアの側にある。乾燥域の考古学は、地中海性気候帯の考古学に比べて大幅に立ち後れており、新たな展開を促すにはあまりにも資料不足である（藤井 2000b）。

現在言えるのは、以下のような漠然とした見通しである。まず、南メソポタミアでは、ワディ・ウバイド、ワディ・ヒール、ワディ・ガダフなどを介した西方ステップ・沙漠地帯との接触が考えられる。ユーフラテス中流域では、ワディ・ハウランが鍵となる。もう少し上流では、パルミューラ盆地やエル・コウム盆地、あるいはビシリ山系との間で、遊牧民の往来があったと思われる。一方、スーサ方面ではカルヘ河添いの、またハムリン地区ではディアラ河添いの、トランスヒューマンスが予想される。新しいパラダイムの成立は、1) これらの地域での遺跡調査、2) ウルク（およびその周辺地域）自体の再調査、この2点にかかっていると思われる。平凡だが、これが筆者の結論である。

最後に一言。上記の批判は、言わば「後出しジャンケン」のようなものである。ウルク・ワールド・システム論は、今後乗り越えていくべき高いハードルを提供してくれたという意味で、やはり優れたモデルであろう。そのことには敬意を表しなければならない。

#### 参考文献

- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago and London, University of Chicago.
- Zarins, J. 1990 Early Pastoral Nomadism and the Settlement of Lower Mesopotamia. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 280: 31-64.
- 小泉龍人 2001 『都市誕生の考古学』世界の考古学17 同成社。
- 藤井純夫 1998 「肥沃な三日月地帯」の外側—ヒツジ以前・ヒツジ以後の内陸部乾燥地帯— 『岩波講座世界歴史2 オリエン特世界』97-124頁 岩波書店。
- 藤井純夫 2000a 「ウルク出土獅子狩り碑に表された直剪鋸について」『西南アジア研究』64巻1号 1-23頁。
- 藤井純夫 2000b 「乾燥地考古学の諸問題—1. 遊牧民の考古学的可視性—」『沙漠研究』10巻4号 259-268頁。
- 藤井純夫 2001 『ムギとヒツジの考古学』世界の考古学16 同成社。